

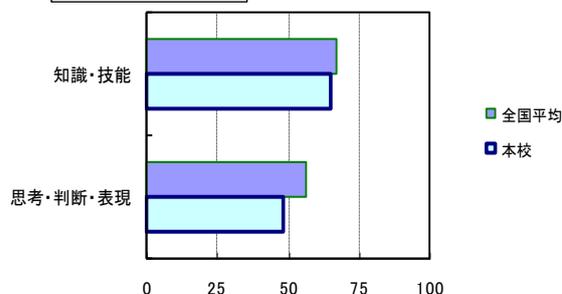
令和5年度 学力向上重点指定校報告書 八木小学校

1 学校の課題

【第6学年対象 全国学力・学習状況調査（算数科）の結果から】

	平均正答率		正答率30%未満の児童の割合	
	全国	本校	全国	本校
H31	66.6	62	8.8	15.6
R3	70.2	62	4.8	7.1
R4	63.2	49	8.9	25.5
R5	62.5	58	9.8	12.0

評価の観点

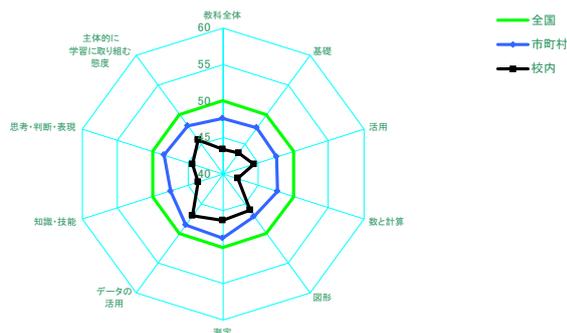


今年度の全国学力・学習状況調査（算数科）の結果を見ると、全国平均との差が4.5ポイント開いていた。また、正答率30%未満の児童の割合も、全国平均と2.2ポイントの差があった。

②(4) 図形の性質を活用して記述する設問においては、正答率が14%と低い結果になっている。また、③(4)の問題文を正確に読み取り、求め方や理由を考え説明する設問では、正答率が36%となっている。これらのことから、知識は定着しつつあるが、問題の内容を正しく読み取ったり自分の言葉で考えを表現したりする力が不足しており、「思考力・判断力・表現力」に課題がみられた。

【第3学年対象 標準学力調査（算数科）の結果から】

	平均正答率		正答率30%未満の児童数
	全国	本校	
R4	73.9	67.5	7人/44人中
R5	74.6	61.1	5人/40人中



第3学年を対象に実施した標準学力調査の結果を見ると、すべての領域に関して、全国平均を大きく下回っている。全体的に内容を理解できておらず、積み残しが多いことが明らかである。特に、「A数と計算」の領域の8割以上の設問で、目標値を下回っていた。また、「思考・判断・表現」における設問では、6問中5問で目標値を10ポイント下回る結果となった。さらに、記述に関する設問では、無解答率が非常に高く、自分の考えを言葉で書く力や書くことができるだけの知識が不足していることが窺える。

また、研究推進の観点から見てみると、昨年度から指定を受け、中学年を中心に授業改善に取り組んできたが、全学年への授業改善はまだ進行中である。本校の児童の学力を向上させていくためには、さらに校内全体に研究を推進させていくことは不可欠である。

以上のことから、学力を向上させていくためには主に次の3点を課題として捉えた。

- ①既習内容の定着が不足しており、積み残しが多いこと
- ②問題を正しく読み取ったり、自分の言葉で表現したりするのが難しいこと
- ③研究をさらに校内全体に普及していく必要があること

2 研究主題

児童一人一人ができるようになる喜びを実感できる授業づくり
～みんなでやっぺいこう チーム八木～

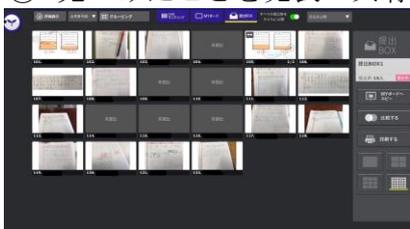
3 取組内容

(1) 八木小授業モデルの集団解決

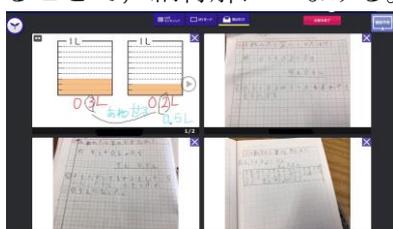
- 児童がオクリンクに提出した考えをもとに、課題に対する納得解をみんなで考えていくようにした。集団解決の一つの例として以下に示す。

【集団解決の1例 第3学年「小数」】

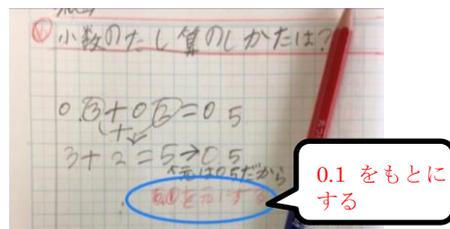
- ① 「みんなの考えの共通点は？」と問いかけ、児童たちはタブレットを見ながら近くの友達と相談して、共通点を見つける。(資料1)
- ② 見つかった共通点を発表する。ここでは、「3+2にしている」「0を消して、後でつけたしている」ということである。(資料2)
- ③ 「どうして0を消して3+2で考えていいの？」と問いかける。その時、「それが分かるように書いています。」とだけ伝えると、児童たちは一生懸命に友達と相談しながら「これかな?」「この言葉じゃない?」と数学的な見方・考え方を働かせようと思考をする。(資料3)
- ④ 見つけたことを発表・共有することで、納得解につなげる。



(資料1) オクリンク上の児童の考え



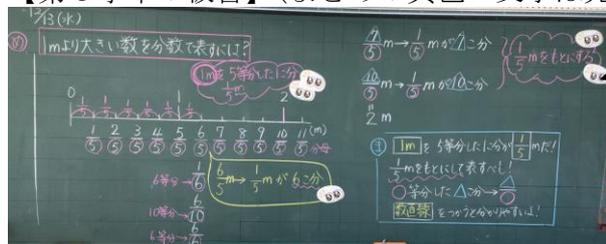
(資料2) 共通点を共有する



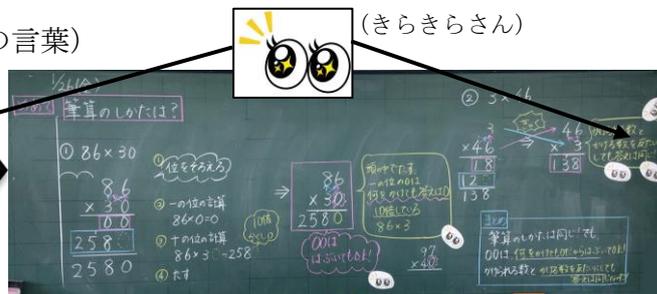
(資料3) 数学的な見方・考え方

- 児童から出た数学的な見方・考え方(きらきらさん)につながる発言は必ず板書した。まとめをする前に、今日のためへの答えとなる言葉に「きらきらさん」を貼らせるようにした。そして、「きらきらさん」が貼ってある言葉を使って、児童と一緒にまとめをするようにした。さらに、自分の言葉で表現できる力をつけるために、まとめを自分の言葉で書くというように段階的に実施した。

【第3学年の板書】(まとめの黄色い文字は児童の言葉)



穴抜きのみでまとめる。



続きを自分の言葉で書く。

(2) 校内研究体制(詳細は別紙1・2参照)

- 校内全体で共通の取組を進めた。
 - ・八木小授業モデルを実践すること
 - ・朝の時間(水・金)に算数タイムをすること
 - ・わくわくルームの活用
 - ・各ブロック(低・中・高・専科・特支)で公開研または全体研・ブロック研を実施すること
 - ・ブロックごとの指導案検討会を実施すること(研究主任・研究推進リーダー参加)
- 研究推進リーダーが、前期に2回・後期に2回、各クラス・専科・特支の授業を観察し、放課後によかったところや課題点を授業者と話し、よりよい改善策を一緒に考えて取り組むようにした。
- 役割分担をして、それぞれの立場で研究推進に取り組んだ。



観察メモをもとに話し合う

運営側

- ・管理職・・・総括, 対外的な対応, 授業観察, 授業者への助言
- ・研究主任・・・職員への周知, 研究授業の計画・調整, 外部講師との調整, 指導案検討
- ・研究推進リーダー・・・授業観察, 授業者への提案, 管理職との連携, 他校との情報共有, 指導案検討
- ・研究推進部・・・公開研の準備・運営, ICTミニ研修
- ・教務主任・生徒指導主事・・・公開研の準備・運営サポート

実践側

- ・各クラス・専科・特支・・・授業改善の実践, 他クラスの授業参観

4 検証結果

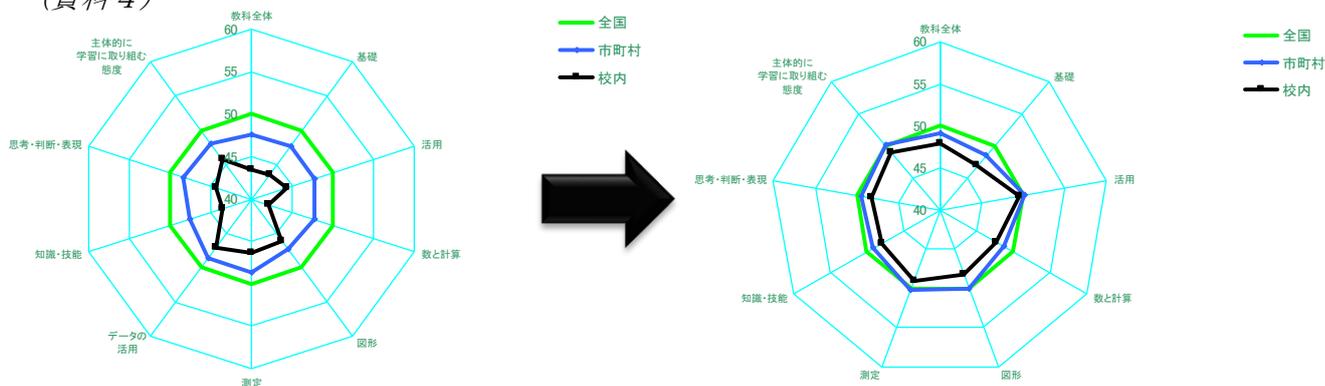
①既習内容の定着が不足しており、積み残しが多いことについて

【第3学年対象 標準学力調査(算数科)の結果から】

令和5年 (5月)	平均正答率		正答率30% 未満の児童数 5人/40人中
	全国	本校	
	74.6	61.1	

令和5年 (12月)	平均正答率		正答率30% 未満の児童数 5人/40人中
	全国	本校	
	69.9	65.3	

(資料4)

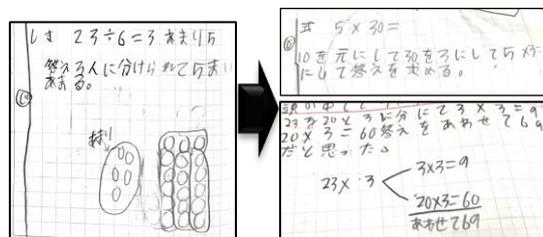


第3学年を対象に実施した標準学力調査の結果から、全国平均との差が5月は13.5ポイントだったところ12月は4.6ポイントに縮まった。また、特に全国平均との差が大きかった「A数と計算」の領域では、15.5ポイントから5.2ポイントにまで縮まり、改善傾向が見られた。各領域・評価の観点においても、バランスよく全国平均に近づいた。(資料4)

②問題を正しく読み取ったり、自分の言葉で表現したりするのが難しいことについて

「思考・判断・表現」に関する設問において、5月には6問中6問で全国平均を大きく下回っていたが、12月では7問中3問にまで減っていた。特に、「考え方にあうように括弧を使って1つの式に表す」設問では、5月には全国平均との差が39.5ポイント下回っていたが、12月では全国平均よりも7.1ポイント上回る結果となった。問題文を正しく読み取り、場面と式の意味を結び付けて思考する力がつきつつあると考えられる。

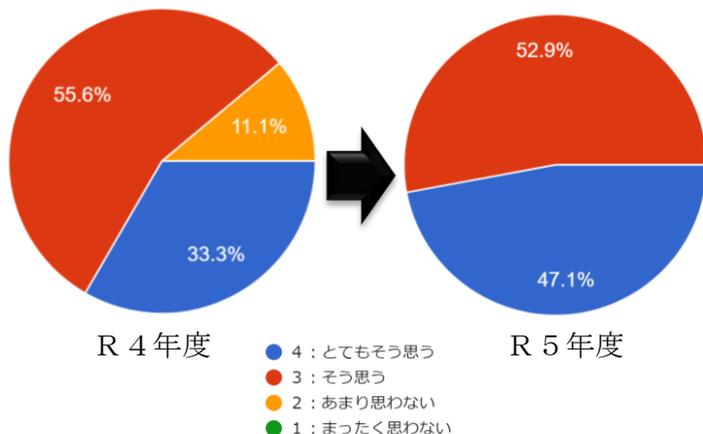
(資料5) 【第3学年A児のノート】



また、(資料5)のA児は5月当初「知識・技能」はあるが、自分の考えをノートに書いたり友達に伝えたりする力に課題があった。しかし、八木小授業モデルの自力解決を進めていくことで、自分の考えをノートに書くときの言葉や表現に変容が見られ、友達との交流も増えた。このような児童は、学年で複数みられた。

③研究をさらに校内全体に普及していく必要があることについて

(資料6) 【職員アンケートの結果から】



職員へのアンケートにおいて、「今年度、研究指定を受けたことで、自分の授業改善が図られたと思いますか。」という質問に対して、今年度はすべての職員が肯定的な回答となった。理由には、八木小授業モデルを実践することで「児童主体の授業を組み立てるようになった」や「自立した児童を育成するために自分の意識改革につながった」、「定期的に研究推進リーダーと話すことで授業づくりの課題が分かった」「児童の考えや はてなから授業を作っていくようになった」など授業改善の効果を実感し、教員自体が主体的に研究推進に取り組むことにつながったと考えられる。(資料6)

5 研究成果

成果

検証結果や日々の授業実践の様子から、本校の課題に改善傾向が見られた。その要因として、以下の5点が考えられる。

- ①八木小授業モデルの実践により、毎時間確実に評価問題に取り組み、内容理解につなげたこと
⇒どの学年・専科でも、八木小授業モデルを継続的に実践したことにより、基礎的な知識が定着しつつある。また、自力解決では自分で選択して取り組める時間を設定することで、解決に向かって主体的に取り組むようになったことも内容理解につながったと考える。
- ②校内全体で補充学習に取り組んだこと
⇒基本的な四則演算に繰り返し取り組んだり、ドリルパークの学び直しドリルで下学年の学習を振り返ったり、自分で目標を立て計画的に学習を進めたりする取組を校内全体で行ったことにより、既習内容の定着を図ることができたと考える。
- ③みんなで納得解につなげる集団解決に取り組んだこと
⇒ICTを活用して、児童の考えから思考を広げ、解決につながるように授業を進めたことにより、児童が数学的な見方・考え方を自然と捉えたり、図と式や言葉と式をつなげて考えたりすることができるようになってきたと考える。また、集団解決の中で教師が「なぜ?」「どうして?」と理由を聞き、児童が納得するまで理由を説明する機会を多く持つようにしたことにより、自分の言葉で表現する力につながったと思われる。
- ④数学的な見方・考え方を働かせたまとめになるようにしたこと
⇒児童の言葉から出た数学的な見方・考え方を必ず板書し、まとめに入る前に「きらきらさん」として授業のポイントを押さえることにより、自然と数学的な見方・考え方を捉えられるようになったと考える。そして、「きらきらさん」をもとにして、段階的に自分の言葉でまとめを書くようにしていったことが「思考力・判断力・表現力」の向上につながったと考える。
- ⑤役割分担による校内研究体制を整えたこと
⇒それぞれの立場でできることを打ち合せて実践したことで、教員みんなの研究になったと考える。授業者だけでなく学年やブロックで指導案検討を重ねたり、研究推進リーダーと授業を振り返ったり、他クラスの授業参観し自分の授業に生かしたり、公開研や全体研・ブロック研に取り組んだりしたことにより、教員一人一人が研究を自分事として捉え主体的に授業改善に尽力できたと思われる。

課題・改善点

標準学力調査や児童質問紙、職員アンケートの結果からこれからの課題として以下の2点を挙げ、今後の改善策を考える。

- ①算数科の授業で学習したことを普段の生活で使ってみようと思う児童が少ないこと
⇒2～6年生の90%近くの児童が「算数の授業はよく分かりますか」という質問に対して肯定的に回答しているが、「普段の生活に使ってみようと思う」児童は、70%程に落ちる。また、職員アンケートにおいては、「八木小授業モデルが他教科に生かせる」とすべての職員が肯定的に回答した。以上のことから、八木小授業モデルを他教科にもつなげて授業改善に取り組んでいくことにより、児童たちが算数科を他のことにも生かしてみようと思えるようにしていきたい。そして、他教科の力も伸ばすことで、算数科だけでは付けることが難しい「思考・判断・表現」の力を付け、他教科の力も算数科の力も伸ばしていきたい。
- ②学習に対する意欲が停滞していること
⇒授業改善に取り組んできたことにより、ある程度の苦手意識の改善や意欲の向上は見られたものの、根本的には「やりたくない」と考える児童が多く見受けられる。しかし、「学習の個性化」に取り組んだ単元についてアンケートした結果、約95%の児童が「学習の進め方が自分に合っている」と捉えていた。理由としては、「自分のペースで学習ができるから」「友達に聞きながら一緒に進められるから」と答えた児童が多かった。また、授業の様子からも普段以上に主体的に取り組んでいることが見て取れた。以上のことから、「学習の個性化」が図られる教科や単元を開発することで、児童が「自分に合った進め方」を自己選択・自己決定する機会を増やし、自立した学習者となれるように研究を進めていきたいと考える。